

立教大学

日本文学

第一〇九号

加藤定彦教授 定年退職記念号

二〇一三年一月二十五日印刷 二〇一三年一月三十日発行

立教大学日本文学会



加藤定彦 教授

「千鳥塚」再考

表の写真は名古屋市緑区の「千鳥塚」である。貞享四年（一六八七）、芭蕉が鳴海連中とともに「星崎の闇を見よとや啼く千鳥」以下の歌仙を巻いた記念に建てたと伝えられ、「芭蕉存命中に建てられた唯一の翁塚（おきなづか）」というところで、昭和五十二年（一九七七）、名古屋市の史跡に指定された。現在（平成二十四年秋）、名古屋市博物館で開催中の特別展「芭蕉 広がる世界、深まる心」に、その折の鳴海連中が執筆した歌仙懷紙と芭蕉筆の自画賛句も出品されている。

碑面は中央に大きく「千鳥塚」、その下に一座を捌いた宗匠名を「武城江東散人（右側）／芭蕉桃青（左側）」と刻し、碑裏の上部にはなぜか「千句塚」とあって、その下に「知足軒寂照」ら連衆六人の名と、側面に「貞享丁卯年十一月日」の日付が彫られている。興行後間もなくの建碑と伝えるのも肯かれる。

ところが、芭蕉生前から親密な交流のあった鳴海の門人知足の日記（森川昭氏『俳文藝』43他に翻刻）はもちろん、没後、遺志を継いで息蝶羽が刊行した『千鳥掛』（正徳二年・一七一六序）にも一切「千鳥塚」への言及はない。

宝暦六年（一七五六）、江戸の白井鳥酔が鳴海を訪れ、蝶

羅（蝶羽息）らから聞かされた伝承によれば、「千鳥塚」は、芭蕉が亡き後の形見として句想を得た三王山に小石を運んで築いた塚を、その志を継いだ連衆六名が合資して成就したものとという（『風字吟行』）。

しかし、知足没後の蝶羽日記（森川氏『帝京大学文学部紀要』29他に翻刻）にも建碑の記事はなく、かわりに享保十一年（一七二六）の芭蕉三十三回忌に白之ら地元連中が千句を催したことが見え、「よび次や三十三句此ちどり 蝶羽」の発句も記されている。こうした事実から、「千鳥塚」は三十三回忌を迎え、鳴海連中が千鳥の千句を興行し、「千鳥塚」を築くとともに、その句稿を埋めて供養したもの、との結論に至ったのである。

歌仙の成ったその十一月七日、三たび芭蕉展に出掛けた。「千句塚」の碑面に彫られた「武城云々」の芭蕉の署名が、知足に乞われて送った芭蕉の笠寺奉納句稿（貞享二年春頃筆）の署名に依拠することを、現物で確かめるためである。その足で、「千鳥塚」のある公称「千句塚公園」（三王山）に向かった。「千鳥塚」碑裏の「千句塚」が後の彫り足しでないことを確かめた後、丘のへりに立って、天白川の対岸、西南方面に目を凝らしてみた。午後の日差しのもと、街並みが茫々とつづくばかりで、星崎をそれと認めることは出来なかった。

二〇二二・一一・八

加藤定彦 記